



**学習者の自尊感情を重視した  
Humanistic Approachによる  
コミュニケーション活動**

全国英語教育学会第35回山形研究大会  
2011年8月20、21日(山形大学)

飛田ルミ(足利工業大学) 阿久津仁史(文京区立茗台中学)  
鈴木政浩(西武文理大学)

---

---

---


---

---

---

---

---



**本日用意した資料**

1. パワーポイント配布資料(本資料)
2. 活動に使用したプリントと授業の省察・感想等
3. 英語授業における「楽しさ」に関する質問紙
4. 学習者の知能特性を測定する質問紙(MI Inventory)

恒安・阿久津・鈴木(2010)における学習者の知能特性を測定する質問紙(MI inventory)

鈴木(2011)における「英語授業における『楽しさ』」に関する質問紙(事前事後調査)



**はじめに**

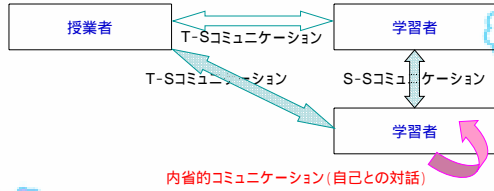
Humanistic Approachとは

- ④ Moskowitz(1978) : 自尊感情を高める学国語学習
- ④ Communicative Approachとの接点(長澤,1988)
- ④ 縫部(1986) : 構成的グループエンカウンター
- ④ 授業内コミュニケーション(米山, 2003)、における内省的コミュニケーション(鈴木, 2011a)
- ④ 企業研修等での活用

鈴木(2011)より

Humanistic Approach(以下HA)とは、Moskowitz(1978)がまとめた指導法で、自尊感情を高めながら、他者の価値を認めるように学習者を導く外国語の指導法である。会話練習や英文を書く取組を通じて、仲間や仲間の価値を理解し、人間的理解を深める活動である(鈴木, 2010:39)。

## 授業内コミュニケーション



鈴木(2011a)より

コミュニケーション活動は、「自己との対話」があつてこそ実りあるものになる。コミュニケーション活動の前にじっくり考え、コミュニケーション活動の後にじっくり振り返ることが広い意味での人格形成につながる。

## HA授業の実施と成果検証

- 英語授業に対する印象に肯定的な変化をもたらすかどうかを検証すること。
- 学習者の内省的コミュニケーションに対する意識を高めるかどうかを検証すること。

---

---

---

---

---

---

---

---

## 活動のねらい

時期区分	活動
前期 出会いの時期	互いのよい点を知り合う活動
中期 仲良くなり始めた時期	共通点や相違点を知り、認め合う活動
後期 振り返りの時期	互いの価値観の交流、仲間への感謝の気持ちを伝える活動

対象者: 西武文理大学(サービス経営学部・看護学部)の1年生  
 授業: 英語のうち30分程度を利用(その他60分をテキストに充当)  
 評価: HAの授業については、仮想会話文作成を試験に追加

活動に使用したプリントと授業の省察・感想等は資料2参照

---

---

---

---

---

---

---

---

## 活動事例 (前期: 出会いの時期)

活動	内容	特徴的感想
活動1 肯定的な形容詞を使った自己紹介	ペアとなった相手に対し、肯定的な形容詞のリストから相手の印象を選び会話を完成させペアワークに取り組む。	嬉しかった 楽しく取り組み、仲良くなれた 自分の思う印象と異なる
活動2 色のイメージと相手の印象を結びつけた会話練習	相手の選んだ色から連想する相手の印象を言い合う。	相反する感想 たくさん色があった方がよい 迷う 意外だが嬉しい 自分に合っているとは思えない
活動3 相手の外見(服装)をほめる活動	相手の着ている服に対する印象を肯定的な形容詞から選びほめてあげる。	活動1、2より取り組みやすい 友だちの輪が広がった もっといい服を着てくればよかった

導入順序: 活動3 活動1 活動2 (活動2はもう少し仲良くなってから)

この時期は、友だちからのコメントと自分自身に対する印象のギャップが大きいことがあるため配慮が必要。また、男女による活動の差なども大きい。クラスの親密さの度合いに応じて行動の導入時期や順序を考える。特に「出会いの時期」には配慮が必要。

## 活動事例 (中期: 仲良くなり始めた時期)

活動	内容	特徴的感想
活動4 好きな番組・映画	好きなテレビ番組や映画が何かを相手に聞く。聞かれた相手は、どのように面白いかを相手に伝える。	下宿のためテレビがない、学業とアルバイトで忙しいためテレビはあまり見ないなどの理由から特筆する感想なし。 好きな歌手、歌、CDをテーマにし、それにまつわる思い出や理由を伝える。
活動5 尊敬するひと・あこがれのひと	自分の尊敬する人やあこがれの人から思い浮かべる形容詞を書き出し、自分との共通点を指摘してもらう。	あこがれの人は自分の目標である場合があり、「嬉しい」と感じる感想があった反面、現実の自分との違いを強く意識した学生もいた。
活動6 大切な人へのプレゼント	家族・友だち・大切な人を思い浮かべ、今プレゼントしたいものを考えて相手に伝える。	会話そのもの以上に、プレゼントしたい理由で盛り上がった。各自が思いやりの気持ちをもってプレゼントを考えていることを共有し合った。

中期の活動には「そう思った根拠」を付け加えさせる。

活動4: 「好きな番組や映画」というテーマは、「そうなんだ」と納得して終わり発展性がない。「好きな歌、歌手、CD」などのほうが、思い出や体験とつなげることができる。

活動5: 自分に対する認識とのギャップを埋めるために具体的な場面を思い起こさせたり、理由を書かせる。

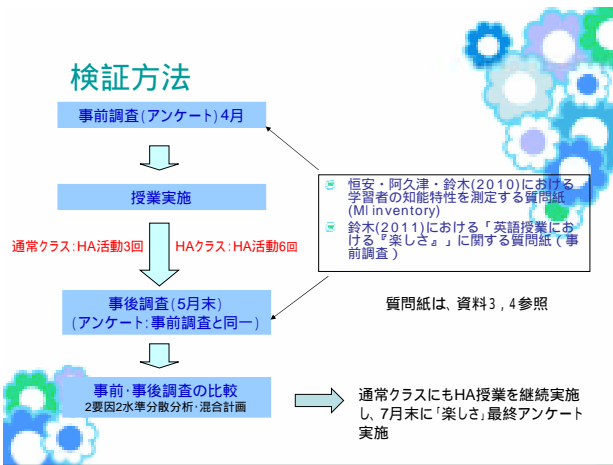
活動6: プレゼントは大切な人への思いに意外性があり楽しい活動になる。

## 活動事例 (後期: 振り返りの時期)

活動	内容	特徴的感想
活動7 究極の選択 (価値のランキング)	リストにある語句を、大切な順番に並べて相手に伝える。その理由を交流し合う。	共通点と価値観の相違が際立ち、お互いの考えた理由について深く考える感想が多い。
活動8 仲間の印象	半期を振り返り、周りの仲間に相手に対する印象を伝える。	活動1や活動2に取り組んだ時期とは比較にならないほど仲間のコメントを肯定的に受け入れていた。
活動9 Thank you letters	半期を振り返り、周りの仲間に感謝のことばとその理由を述べる。	嬉しい、英語だと気持ちを伝えやすい、良いところを認め合うのは素晴らしい、友だちの大切さ、友だちが増えた、感謝の気持ち、英語のコミュニケーションに積極的になれた、自信がついた、英語力がついた、等々

半期の取組により、HAのねらいがほぼ達成された(資料2, p.6)。

活動9の感想、前期取り組んだ感想は資料2, pp.5-6を参照。




---

---

---

---

---

---

---

---

### 実施期間および対象者

- 2011年4月から5月
- 埼玉県内の私立大学1年生74名  
(HA授業のクラス32名、通常クラス38名)

---

---

---

---

---

---

---

---

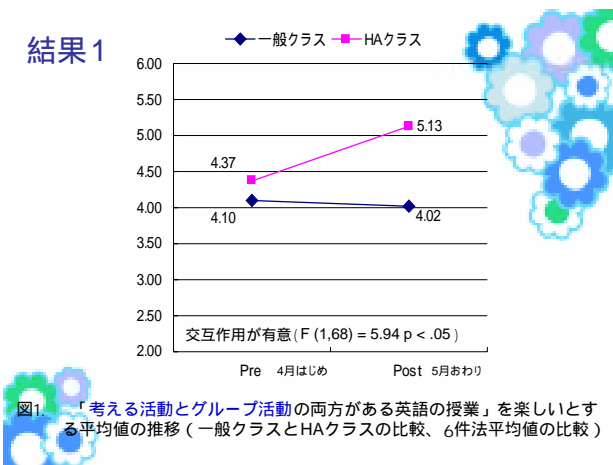


図1. 「考える活動とグループ活動の両方がある英語の授業」を楽しみとする平均値の推移(一般クラスとHAクラスの比較、6件法平均値の比較)

英語授業の印象に関しては、鈴木(2011)の質問紙における「考える活動とグループの活動の両方がある英語の授業」を楽しみとする質問項目に関して交互作用を確認した。

結果2

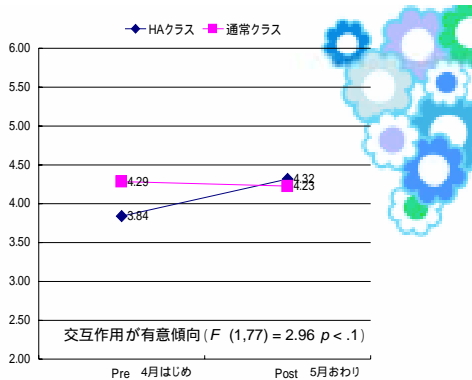


図2 「自分のことはよくわかっている方だ」(MI inventory) 平均値の推移 (一般クラスとHAクラスの比較、6件法の平均値比較)

MI inventoryの質問項目では、「自分のことはよくわかっている方だ」について、有意傾向であるが交互作用を確認した。 $p = .68$ であり、もう少し長期的に取り組むと有意に交互作用が確認できた可能性がある。

結果2

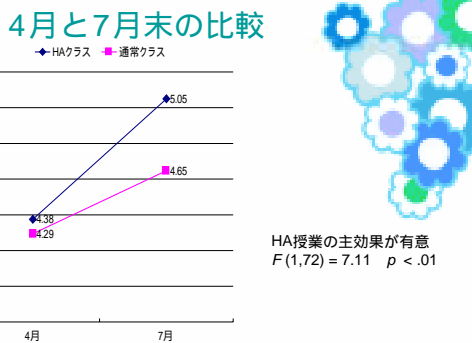


図3 「考える活動とグループ活動の両方がある英語の授業」を楽しむとする平均値の推移 (一般クラスとHAクラスの比較、6件法平均値の比較)

4月の事前アンケートと7月末の最終アンケートの両方に回答した対象者のデータを使用。導入時期が早いHAクラスは通常クラスに比べて伸びが顕著である。これは導入時期が早かったことから、4月に築いた良好な人間関係の中でその後の授業が進んだためと考えられる。

考 察

- 日本の学習者は自尊感情が低く、自分についての意識を高めたり知ったりする機会が少ないが、HAの活動は自己認識を高める可能性がある。
- 内省的コミュニケーションは、じっくり考える機会を増やし、思考能力を高めることにつながる。

「静と動が交互にある授業」「じっくり考える授業」は学力を形成する上で重要であり、内省的コミュニケーションを促進する活動は学力形成につながると考えることができる。

### ホームページ情報等

- 鈴木政浩のホームページ  
< Humanistic Approach 関連の実践研究 >

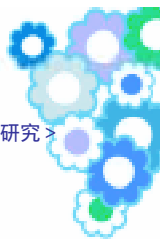
<http://msuzuki.sakura.ne.jp/>

- 国際教育研究所ホームページ  
< よりよい英語授業研究の情報 >

[http://www.geocities.jp/international\\_education\\_inst/index.html](http://www.geocities.jp/international_education_inst/index.html)

- 鈴木政浩 メールアドレス：  
suzuki6111@gmail.com

プレゼン資料等のダウンロードが可能です。



国際教育研究所は、羽鳥博愛東京学芸大学名誉教授が主催する研究会。毎月月例研究会・座談会を行っている。

本発表で使用した「英語授業における『楽しさ』アンケートは、関東近県の中学生・高校生・大学生約1000名を対象に実施し、報告集を作成中。報告集をご希望の方は、ご連絡をお願いします。

### 参考文献

Moskowitz, G. (1978) *Caring and Sharing in the Foreign Language Class*. Rowley, MA: Newbury House.

縫部義憲(1986)『教師と生徒の人間づくり - グループ・エンカウンターを中心に』。澁々社

鈴木政浩(2010)『コミュニカティブ・アプローチの今後の課題』山岸信義他編(2010)『英語授業デザイン 学習空間づくりの教授法と実践』 pp.33-43 大修館書店

鈴木政浩(2011a)『外国語(英語)の特性と青少年の実状からみた人間的アプローチの必然性』『紀要』第17号, 40-60 国際教育研究所

鈴木政浩(2011b)『英語授業の『楽しさ』を構成する要因に関する研究 英語授業学からのアプローチ』第35回関東甲信越英語教育学会神奈川研究大会(口頭発表)

恒安真佐・阿久津仁史・鈴木政浩(2010)『多重知能理論に基づく授業実践事例』山岸他編『英語授業デザイン 学習空間づくりの教授法と実践』 180-196 大修館書店

米山朝二(2003)『英語教育指導法事典』研究社

---



---



---



---



---



---



---



---